

日本エッセイスト・クラブ

2020 冬

NO.72-II

会報

第10回応募エッセー特集



第68回 日本エッセイスト・クラブ賞

受賞作

裁判官も 人である

良心と
組織の
狭間で

Tatsuya Iwase
岩瀬達哉



100人を超える裁判官への取材でわかった苦悩するエリートたちの「素顔」
あなたに人が「裁ける」か？

第68回

日本エッセイスト・クラブ賞
受賞

講談社

裁判官も人である 良心と組織の狭間で

岩瀬達哉

裁判官たちは日々、何を考え、何に苦悩しているのか。100人以上の裁判官に取材したジャーナリストが、彼らの生態を明らかにする。

1700円(税別) 978-4-06-518791-3 講談社

万葉学者、 墓をしまい母を送る

上野 誠

現代万葉研究を大きくリードする学者は、故郷福岡の墓をしまい、老いた母を呼び寄せ、七年のあいだ介護して見送った息子でもあった……。体験と学問を軽妙な筆致で往来し、死について深く考えた、真の「エッセイ」

1400円(税別) 978-4-06-519239-9 講談社

上野
誠

万葉学者、
墓をしまい
母を送る



講
談
社

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2020 冬

応募エッセー特集

2

会員近況・自著紹介

27

事務局から

28

日本エッセイスト・クラブ定款

30

会員名

32

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

応募エッセー特集

今秋、広く会員の皆さまのエッセーを募集したところ、8編の作品が寄せられました。会員のエッセー募集は、当クラブ創設60周年記念で初めて行われて以来、今年で10回目です。本会報には、今回応募の全作品を掲載します。

なお、昨年から会報冬号は電子版として刊行しております。

題名

筆者（五十音順）

「ユーチューバー」になる

秋山 秀一

老いの楽しみ

小曾戸明子

被爆75周年の年に米寿を迎えて

大岩 孝平

我が本籍地、陸前高田市再訪

菅野 光公

「海へ出て、海から還る」 羽田✕便

霧山 康二

花の背丈は長短いろいろ

佐藤 きむ

「生きてしまう」こと

野中 康行

私のルーツ探し

吉原 賢二

「ユーチューバー」になる

秋山 秀一

三年前の五月、初めてユーチューブで動画を配信した。昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲を体験したその体験談を語っている母の様子を動画に撮って配信したもので、タイトルは「秋山よし 九五歳、東京大空襲を語る」。

その五ヶ月後、母は亡くなった。今となれば、生前の姿を見ることができる貴重な映像だ。こ

のことがきっかけで、「旅行作家秋山秀一の世界旅」を配信し始めた。

これが、思っていた以上に面白いのだ。

配信時期は、未定。テーマや動画の長さなどについてのルールも特になく、海外へ旅に出たときに現地で撮影したものが多い。

執筆した原稿が掲載された雑誌が届いたときや講演等の近況報告的なこと、本や新聞など読んで話題となりそうなことが浮かんできたときに、わが家で三脚に乗せたカメラに向かう。

撮影機材は、数万円で購入したコンパクトデジタルカメラ一台。

部屋で動画の撮影をするときのライティングは天井の蛍光灯のみ。音声はカメラが拾ってくれるので、マイクもなし。

撮影する仮設のスタジオは部屋の一部を少々アレンジしただけだが、動画を見た人のなかには「撮影場所を見てみたい」と、興味を示す人もいる。

第一回目の配信は二〇一七年五月一四日で、タイトルは「ルート六六」。百回目の配信が二〇一八年九月二八日。二百回目の配信が二〇二〇

年五月一七日で、タイトルは「ポルトの道を行く」。

本人が楽しんでやっているのだからこれでもいいのだと、勝手に解釈して、配信を続けた結果、この三年半の間に、配信数が二三〇本を超えた。

二月以降海外には出られないが、それまで、この三年ほどの間に旅をした二七か国で撮った動画には、以下のようなものがある。

第一〇回、福建省への旅

第二〇回、キャメロン・ハイランド

第三〇回、シドニー まち歩きの楽しみ

第四七回、ロンドン

第四八回、上海

第五六回、マルタ共和国、ゴゾ島を歩く

第八二回、ビクトリアの滝をヘリコプターから眺める

第八三回、メキシコシティー

第九八回、雨のニューカレドニア

第一〇三回、カナダ、ケベックの紅葉

第一〇八回、ナザレ、オビドス、ロカ岬

第一〇九回、リスボン

第一一二回、ホノルル、ワイキキビーチから

第一二五回、小雨降るハイデルベルクを歩く

第一三〇回、ヒヴア（ウズベキスタン）

第一四四回、ブルガリア。二〇一九年欧州文

化首都・プロヴディフ。

第一四八回、チャイコフスキーのお墓まで、

ネフスキー通りを歩く

第一五一回、ミャンマー、ヤンゴン

第一五八回、エストニア、キヒヌ島へ

第一六六回、チュニス、シティ・ブ・サイド

第一六八回、北アイルランド、世界遺産ジャ

イアンツ・コースズウェイ ベル

ファスト

第一七〇回、ダブリン、雨

第一七七回、エフエソス、アフロディシアス

第一八〇回、イスタンブールを歩く

一〇月末の時点で、チャンネル登録者数は四人。視聴回数はなかには五百回を超える、なんてものもあるが、ほとんどが百回程度。

まあ、何はともあれ、本人以外にも見てくれる人がいる、ということはあるがたいことである。

あきやま・しゅういち 旅行作家。一九五〇年東京都生まれ。東京教育大学（現・筑波大学）大学院修了後、東京成徳大学教授等を経て取材・執筆に専念。これまでに訪れた国と地域は九〇カ所以上、海外渡航歴は二〇〇回を超える。千葉県鎌ヶ谷市在住。

老いの楽しみ

小曾戸 明子

母とのコラボ歌集をまとめることを以前の会報に記して早や七年、まだ手つかずである。母は白寿となり、今は北杜市の特別養護老人施設のお世話になっている。コロナ禍にて面会もようやく個室ベッドで可能となり、遠路も苦にならなくなる。

この冬を越えるかどうか、と母の主治医から告知を受けて何度目の冬になるだろうか。おかげでいつもターミナル、終末期にあることで、日日なお共に時を刻めることをありがたく思うことができる。帰路の車窓から富士の峰が拝めると幸せな気持ちになる。

逸見久美さんの第五歌集『明星探求』に背を押されている。なかでも「わが病」や「転倒す」のうたは、各六〇首ほどあり、エピソードが年月日と共にいくつか記されている。一九二六年七月生まれの逸見さんは、この十余年大変な病いを重ねてなお歌集を編まれている。その心意気は頭がさがる。長年の与謝野晶子研究への執念がその強さを支えているのだと思う。

なかでもパソコンとの共働作業を詠む楽しいうたの数々、一転してパソコン再起不能となり、

生き返りたるパソコンへのまなざしはまさに愛児のようだ。

A I 万能の世に警告している内容もあるかもしれないが、パソコンもインターネットもメールも縁を持たない私にはわからない。

「転倒す」では、東京駅の八重洲口にて 平成十二年三月 『巧みな転がり方よ』と医師は言ふ地球の引力にままなる我か」他計十五首。

玄関の絨毯に躓きて転倒す 平成二十一年七月二十三日 「再三の転倒なきを祈りつつ杖持ち身をば守りゐる日々」他計十三首。

夜中に転倒す 令和元年六月五日 「トイレ終へ立つ一瞬に躓きて裂けし額は血の海となる」「掛かり付け山王病院の脳検査、出血多量は脳救ひしと」令和二年二月十三日、夜明けの転倒 「明け方の廊下に足を滑らせて転び思はず額を打ちぬ」他計七首。

「転倒す」のうたは切実でよみごたえがある。私の体験は、市の体育館でバトミントンの練習中に生じた。何か体を動かすことをしたいと思ひ、八〇代の女性コーチにも心ひかれた。専用のシューズをはいた初日に転倒。右半身や頭を

打つも、幸い骨折はなく、それ以来古いはき慣れたくつ一足で暮らしている。うたに詠めたのか、心もとない。

転倒しない運動として、お能を体験し、毎週謡や仕舞に親しみ一年が過ぎたが、休むことなく楽しめている。うたには詠めないが、歩行や姿勢を意識するようになった。そんな中、久々に山に登り新たな楽しみを感じた。

筑波山 令和二年十月六日

植物を観にゆく吾ら朝早く三密さけて筑波道ゆく

筑波山すそ野を染める紅色は群生したる彼岸花なり

ご神体二つの峰をあほぎつつケーブルで着く御幸ヶ原ゆきがはらよ

山頂へ岩場つたひてよふやくに古き社殿はひそやかに建つ

みはるかす関東平野広がれり雲なき雲居に富士は見えずも

雪の季鉄幹晶子もおとずれて江戸屋に泊り未明に登る

積雪の御幸ヶ原に降り登る山頂よりは富士の雪

見ゆと

旅に生く足の強さをまざまざと晶子五十三歳昭和六年

旅するは仕事なるべし歌詠みて人らに会ひて病

ひいとはず

自粛とふわが不養生とじこもり足の酷使で翌朝
冴える

(所属歌誌への投稿歌から)

私のうたの素材として歩行のあり様を意識して
詠んでいきたい。母とのコラボ歌集も気持あら
たにまとめたい。

おそど・あきこ 1945年仙台生まれ、本

籍は宮崎県延岡市。医師。精神保健指定医。お

そど(未病)クリニック・出張相談医療に従事。

著書は歌集『むじゅ』、『方法としての手紙』

(刊行未定)。日本東洋医学会、日本医史学会に

所属。八王子市在住。

被爆75周年の年に 米寿を迎えて

大岩 孝平

1932(昭和7)年5月13日生まれ88歳。

コロナウイルス騒ぎの最中に米寿を迎えま
した。米寿を迎えるにあたって私には二つの想
いがあります。一つは、他の人と同じように
間生きてきたのだという想い。

もう一つは、1945(昭和20)年8月6日
午前8時15分、広島に世界最初の原子爆弾が米

軍機によって投下された時、私は13歳、旧制中学1年生でした。当日朝、体調が悪く学校を休み、爆心地から約2キロの自宅で横になっていた時に被爆しました。奇跡か偶然か命拾いして、その後75年間生かされて88歳を迎えたという想いです。

その年のうちに、14万人の広島市民が亡くなり、私の戦前からの友人のほとんどが13歳という若さで、原爆により殺されました。原爆さえなければ、一緒に米寿のお祝いができたはずです。自分が米寿を迎えたといって単純に喜ぶ気にはなれません。お祝いの乾杯と同時に献杯をする複雑な心境でした。コロナのために盛大なお祝いもできず、家族だけでささやかなお祝いをしてもらいました。これも何かの因果でしょうか。

私の人生の方向を大きく変えたのは昭和20年8月15日の日本の敗戦です。戦前・戦中に私が通い、卒業したのは、日本陸軍の将校クラブ偕行社付属の済美幼稚園・小学校でした。陸軍幼年学校にも合格していましたが、9月1日の入学式を待たずに終戦となりました。

被爆者としての私の人生は両親のおかげで当時としては恵まれていたと思います。学生時代もその後もいじめられたり、差別を受けた記憶はなく、順調で豊かな生活を送ることができました。大学卒業の時期は就職難の時代でしたが、卒業前年の昭和30年10月初旬に日興証券に合格し、マスコミの取材を受けたことを思い出しました。

社員生活は、20歳台後半の岡山支店時代に原爆症の影響で肝炎になり、2か月入院、半年間会社を休んだ以外は特に問題はなく、超多忙ではありましたが、家内と二人の娘の家族にも恵まれ、仕事も趣味のゴルフも人並みにできたかなと思います。

それにしても思い出されるのは、二人の幼馴染との思い出です。M君とS君とは学校は異なりましたが、家が近く仲良しでした。いつも近所の道路で遊んでおり、特にS君とはお互い言いたい放題ものを言い、最後は毎日のように喧嘩別れしても、翌日はケロッとして遊ぶ仲でした。被爆前日の8月5日も「お前とは二度と遊ばないからな」と別れたのも普段どおりで、次

の6日はいつもと同じように遊ぶ筈でした。しかし二人とも、朝元氣良く家をでたきり二度と帰っては来ませんでした。明るく元氣だった二人が、わずか13歳という若さで、なぜ「別れとも言えない別れ」に襲われなければならなかったのか。なぜ自分だけが生き延びたのか、辛い思い出がよみがえります。

原爆さえなければ、三人元氣で米寿を迎え、何を語り合いながら盃を重ねたことでしょうか。

ほうたるを待つ被爆死の友を待つ

旅人木

おいわ・こうへい 昭和31年、岡山大学法学部卒。日興證券(株)に入社、金沢支店長、本社総務部長、日興グループ常務取締役を歴任。三鷹市原爆被害者の会会長。東京都原爆被害者協議会名誉会長(前会長)、(一社法人)東友会理事(前代表理事)、日本原水爆被害者団体協議会(会計担当)役員。ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会理事。平成16年度沼津芸術祭エッセー部門芸術祭受賞。

我が本籍地、 陸前高田市再訪

菅野 光公

私は、1944年の晩秋に母の胎内で受精、翌45年4月7日に母が名古屋市北区で、米軍B29の空襲を受け被弾し、右腕関節付近に重傷を負った。「前の日まで元氣だったお前の胎動がぱたりと止んだので、流産を覚悟した」そうだ。名古屋で応急手当を受け、母は実家の和歌山に避難した。幸運にも流産することなく、母は元

気な男の子を生んだ。これが私であるが、私には「故郷が和歌山」という感覚は無い。0歳から高校までずっと大阪で育ったからだろう。このあたりの事情については、拙著『核兵器ではなく花をください』（2018年、かもがわ出版）に詳しい。

さて、私は本籍地を父のルーツである、岩手県陸前高田市に置いたままにしている。同市は、2011年の大震災・大津波で一躍有名になったが、震災以前に私が陸前高田を訪れたのはたったの1回、約40年前で、当時70歳の父に連れられて、7万本の松が生い茂った「高田の松原海岸」を2kmほど歩いた。その松原が、あの大津波によって根こそぎ流され、1本だけ残った松の木が東日本大震災のシンボルとして、繰り返し報道された。テレビの映像を見るたびに「現地で実物を見たい」衝動に駆られたが、災害復旧事業優先で不要不急者の東北訪問は、長期間禁止。

2011年の夏休み、私のゼミ生たち（多摩大学3・4年生）が「東北で震災復興ボランティア活動をする」と、自分達だけで相談して決

めた。「ヨシ、エライ！」私は褒めて育てるタイプ教育者だ。宮城県多賀城市のNPOと連携を取り、同市に学生と入った。足を延ばして陸前高田に行ってみると、港町の賑わいがあった陸前高田市には、雑草以外生き物の気配が全く無く、瓦礫と化した建物群とひっくり返ったまま錆びついた自動車の死体だけの廃墟。言葉を失い、足がすくんだ。その荒野にあの1本松が凜と立っていた。

それから9年、今年（2020年）8月末、3度目の陸前高田訪問が実現した。

1本松は枯れてしまい、プラスチック製の原寸大モニュメントが同所にポツン。周辺は、青々とした広い芝生の公園として整備されており、果てしなく海までつながっていた。生暖かい風が、ほのかな潮の香りを運んできた。

「広島の平和記念公園と感じが似ている」私がそうつぶやくと、「俺もいま、そう感じていた」と、同行した友。根こそぎ全てが喪失した跡地に漂う同様の虚無感・喪失感。陸前高田と広島。

岩手県では、私の苗字「菅野」を誰しもが「かんの」と読む。関東周辺には「すがの」も多い。ジャイアンツのエースは「ピッチャー すがの」だ。大阪では、初対面の人からは必ず「すがのさん」と呼ばれた。冒頭に「私には「故郷が和歌山」という感覚は無い」と書いたが、子供時代を過ごした大阪に対しても、あまり郷愁を感じない。むしろ、大学生活を謳歌した京都に「胸キュン」を感じてしまう。

最近、岩手県に対して郷愁が強まってきた気がする。本稿で触れた陸前高田には、34歳・65歳・74歳の時に、計3回訪れた。岩手県内では、盛岡・八幡平・松川温泉・小岩井・久慈・宮古・釜石などにも足跡を残した。どこへ行った時にも、「かんのさん」と呼んでもらえた。東北弁も私の耳には心地よいし、大阪弁では絶対に使わない「鼻濁音」をマスターしたい願望もある。どうやらDNAから見た私の故郷は、岩手なのかもしれない。

こんなことを思い巡らせていると、私が観光大使をやるとすれば、それは和歌山・大阪・京

都の大使ではなく、『岩手県観光大使』がふさわしいのではないかと思えてくる。この拙文が、岩手県の方の目にとまらないかなあ……。

かの、石川啄木のルーツは、真正正銘岩手だ。
やはらかに 柳あをめる 北上の
岸辺目に見ゆ 泣けとごとくに (啄木)
やはらかに 芝生あをめる 松原の
海辺目に見ゆ 陸前高田 (光公)

そういえば、宮沢賢治も岩手の人だった。こうして、私の妄想は果てしなく広がって行く。

かんの・こうこう 1945年、和歌山県生まれ。69年、京都大学経済学部卒。2001年同大学院エネルギー科学研究科博士後期課程修了。1969年、日本石油㈱に入社、人事、営業、広報部門を経て91年、未来資源研究所(米国ワシントン)客員研究員、93年、日本石油USA副社長。98年から室蘭工業大学、高知大学、多摩大学、名古屋学院大学教授を歴任。2017年、神奈川大学非常勤講師。

「海へ出て、海から 還る」 羽田×便

霧山 康二

これまでは「海へ出て、海から還る」というフレーズで、今年3月末まで羽田発着の航空便は東京湾上を拠点にして飛んでいた。意識してはいなかったが、何故か五七調の郷愁めいたものがあって、心地好かった。

この飛行方式・ルート、今の平穏な環境を創り上げてくれたのは、50年前、陸に住んでいた

臨海都市圏の住民、即ち港・大田・品川・川崎・江東そして江戸川区の町を愛する先住民だ。また町役人や運輸省航空局の中央官僚もそうだったろう。

例えば我が江戸川区では……

昭和46年3月18日羽田空港B滑走路開始と共に、何の知らせもなく空襲の様なジェット機の大騒音が響いた。早朝から、2分おきに毎日、約1カ年の間、御宿上空から船橋・市川を経て都内篠崎・船堀から荒川ポイント目指し深夜まで襲ったのだ。悲鳴を上げた区南部の葛西地区住民パワーと、「江戸川上空を頻繁する飛行機は直ちに高射砲のボタンを押すぐらいのとりきめをしなきゃ」という発言がでる区議会が、区長と一体となって国・運輸省を相手に同年7月15日仮処分申請の訴訟を東京地裁におこし、併せて連日のバス数台でのデモをかけた。翌年2月中央防波堤に1・5億円かけた誘導装置を建設させることで上空飛行の機数を8分の1に減らす等の劇的な騒音改善策をとらせ、翌48年1月には、国との「和解声明」を勝ちとった。この間47年4月には運輸省／鉄建公団相手に「成

田新幹線実施計画」認可の行政処分取消請求訴訟「百害あって一利なし」をおこし勝利している。これが環境を重視した都市開発計画・街づくりの情熱をかけていた、お江戸下町の1自治体が仕掛けたジェット機騒音対策であった。

この頃、羽田空港拡充に伴う航空機騒音障害に悩む自治体は、例えば川崎市では石油コンビナートの上を飛ばさない等夫々に国との約束を得ていた筈であった。

我が住む町江戸川は全土7割が海拔マイナスの低湿地帯であり幾度もの大洪水被害を被ってスーパー大堤防を造り、昭和40～50年代漁民と協力して東京湾を埋め立て海拔5メートルの土盛りをして大干拓地を造成し、建設省や東京都と図って南葛西地区に緑と水の都内最後の大団地を造った。今、旧江戸川の向こう岸は浦安のデイズニールランドがあり、野鳥の森と沼を抱え国連サンクチュアリに指定された葛西臨海公園には、やがて冬の渡り鳥が群舞する。今はオリンピックのカヌー・スラローム会場が、がらんと人待ち顔で陽を浴びている。

東京駅10キロ圏で、のんびりと静かな生活を過ごすことができる、と不動産屋ディベロッパーのパンフレットコピーが謳う。まことその通りであった。

ところがである。昨日まで官僚が自ら言っていた、羽田空港発着の飛行機は「海へ出て、海から還る」を止め、国は今年3月末、逆に「陸に上がって、首都圏を下る」フレーズに変更してしまった。時の政権指示による2020年オリンピック特需（外貨獲得狙い）の外国人旅行者（計画当初2千万人、後に欲張って4～5千万人）倍增政策下での国交省「羽田空港機能強化の検討」計画書を平成27年3月に発表し、住民1割にも（？）周知されないまま強行したのだ。（新型コロナのパンデミックで全世界鎖国状況下で、政権期待の外国人出入国者は前年比99%減とだーれも来ない！のが今年10月の現状ではあるが…）

曰く、南風ではへ離陸…川崎コンビナート上空へ上り、着陸…板橋・中野から1000m以下の超低空で首都圏新宿／東京都庁・渋谷・品

川・東京タワー羽田へ下る、北風では、離陸・荒川河口で高度を上げ清新町の葛西南部から千住大橋へ向かう北行き新ルートである。

国・航空局は昔の約束事には口を拭いて「航空ルート変更は国の権限」と強弁し突っ張っている。

これに反対する首都圏住民は飛行便数5倍増がもたらす、先ず騒音・環境悪化、次に安全上から航空機落下物・墜落事故のリスク拡大を指摘し、渋谷等の住民（原告29名）は本年6月15日東京地裁に、昭和45年来の文書も積み上げて、行政訴訟を起こした。

またまた、ところがある。国の「羽田空港機能強化の検討」では南風・北風飛行ルートは一体の計画であるが、この渋谷等の「訴訟の会」では原告適格や処分性或いは利益性の観点から、我が江戸川・江東区住民の関心高い「北行新ルート」（即ち荒川上空飛行）を除外しているのだ。

こうなると、荒川北行き新ルート下のわれら

住民も自分達でやるしなくなるかも知れない。50年前の和解で得た昭和46年1月25日付け運輸省航空局長名の「声明」が当時の広報「江戸川区お知らせ」に載っている。即ち、局長の「本件仮処分命令申請の意義を認め」「今後はこの飛行方式を継続しつつ、必要に応じ双方話し合い」とある。航空局長も区長も共に良い声明文である。

さて、この原文をこの目で直に見てみたいと思うのが人情。近いうちに国交省大臣官房総務課に電話して、あの看板「海へ出て、海から還る」（註）は何処で落下させてしまったのか聞いてみて、その上で、もう無いかもしれない行政文書「声明」の開示請求をしてみることにしたい、と思っている。

（註）昭和58年国交省「沖合移転」パンフには「海から入り、海に出る」と記載されている。

きりやま・こうじ 1940年9月生まれ。

本名・加固康二。大連、旅順、奉天で5歳まで過ごし、終戦の年12月末、大連から日赤・氷川丸で舞鶴港に引き揚げ。東京・中野で過ごし、

大学卒業後、関西系企業に就職して40年間、主に公害防止&環境プラント建設事業の仕事に従事。70歳でシニア仲間と環境コンサル（一社）ASEEを立ち上げて、10年を経過した。その間、弟の絵画遺作集『hiroshiの絵』（スぺース社）、エッセイ集『サル視点』（文芸社）刊行。

花の背丈は 長短いろいろ

佐藤

きむ

10月に入って連日テレビや新聞は、日本学術会議の会員任命拒否を巡るニュースを伝えている。そのニュースを、私はコロナのニュースよりも真剣に見たり読んだりしながら、夫の姉から50年以上前に聞いた三木安正先生のことを思い起こした。

東大名誉教授だった三木先生が73歳で亡くなったのは30数年前だったから、先生が戦時中弘前市に疎開されていたのは30代の初めだったのだと思う。教育心理学の研究者だった先生は、思想犯として捕らえられて職場の東大を追われ、釈放されてから弘前の下町でひっそりと暮らされていた。

その頃、義姉は弘前市内の小学校の教師をしていた。当時、男性は次々と戦場に狩り出され、教育現場は人手不足。女学校4年生卒業後1年間の養成期間を終えると小学校教員免許状をもたえらるという制度があつて、義姉はそのコースを選んで17歳で教壇に立った。そして、たまたま1年生だった三木先生のお嬢さんを担当することになったのである。

10代の少女の新米先生は、周囲から見たら随

分と頼りなかったに違いない。三木先生は、教育のことを何も知らぬままに軍国教育の現場に放り出された義姉を哀れに思われたのだろう。折に触れては義姉をご自宅に呼んで、いろいろと教示してくださったという。

義姉から聞いた三木先生のこの中で、私の脳裏に最も鮮明に残っているのは、お嬢さんの誕生日の出来事である。

誕生日にぜひと招待されて義姉が伺ったら、戦時中の乏しい食料の中で奥様があれこれと工夫されたご馳走が、ほぼ出来上がってテーブルに並べられていた。

三木先生が、それを眺めて、にこにこしながらお嬢さんに言った。

「ほー、おいしそうだねえ。○子ちゃん、このテーブルの真ん中にお花があったら、ご馳走がもっとおいしくなるんでないかなあ。庭のお花を切ってきたら？」

○子ちゃん、早速庭の花を切って花瓶に入れてテーブルの中央に飾ると、また三木先生は、にこにこしながら言う。

「おー、きれいだなあ。でも、折角だから、も

う少しきれいにならないかなあ。みんなおんなじ長さよりも、短いのもあったほうがよくないかなあ」

お父さんの言葉を聞いて、○子ちゃんは、中央が高く、周囲が低くなるように長さを変えて整えながら、時々手を休めて眺めてはうれしうだった。

奥様も上品な方で「○子は、叱らないで子供を育てるといふ主人の研究材料なんです。学校では扱いにくくて大変でしょうが、どうかよろしくお願いします」と、未熟な担任に注文などつけることもなく、謙虚な優しい方だったという。

花の長さが違っていったほうがいいというのは、子供たちはそれぞれ違った個性があって、その長所を伸ばしてやるのが学校教育の役目なのだということを、義姉に教えてくれたのだったかもしれない。

終戦後、三木先生は東大に復職されて、ご一家は東京に帰られた。義姉もその後上京して、都内の小学校に定年まで勤務した。上京後、三木先生との交流が再開し、結婚式には先生ご夫

妻に仲人をしていただくなど、生涯お付き合いしていただいた。

先生は、戦時中、声高に反戦論を主張したわけではない。子供の人権を尊重するという今では当たり前の理論を根底とする学問の研究者だっただけに、当時の国家態勢に反するということとで拘束された。先生は、あの世から学术会议のニュースをご覧になって、今また同じ彼岸に暮らしている義姉に、何を語ってくださったっているのだろうか。

さとう・きん 1932年、青森県弘前市生まれ。55年に弘前大学教育学部卒業。同大学教育学部附属学校に勤務後、同教育学部（国語科教育）を98年定年退職。著書に『国語授業のいろは』（三省堂）『国語教育の窓』（津軽書房）等の国語教育関係書のほか、『姑三年、嫁八年』『80代の今と 50代の昔をつなげてみれば』等のエッセイ集、訳書に『学問のすすめ』『福翁百話』（角川ソフィア文庫）の現代語訳がある。



「生きてしまう」こと

野中 康行

田舎（岩手県・紫波町）でひとり暮らしをしていた父が、4年前の6月、102歳10ヶ月で亡くなった。100歳になるころから兄妹が交代で見守りに行っていたが、そのとき、父がよく言っていた。

「長生きはよいことばかりでない。人さまに迷惑をかけるだけだ」

朝、起きて台所に顔を出すと、「ああ。今日も生きていた」とつぶやいていた。

たまに寄ってくれる隣近所のお年寄りからは長生きを褒められたが、居心地が悪そうに笑ってうなずいていた。

田んぼは30年も前から親戚に託し、母とふたりでそう広くない畑に野菜を作って過ごしていた。母が亡くなりその後の10数年、父はひとりできた時間に取り、新聞をよく読み、畑仕事をこなして、きっちり三食とって床についていた。

ひとりでの買い物や食事の用意は危険だと兄妹が交代で見に行くようになったが、誰も都合がつかないときはショートステイを利用してもらった。われわれにはさほど手のかからない父だと思っていたが、それでも父は「すまない」を連発していた。

どうも、本人は「生きている」ことは迷惑をかけることで、「生きてしまった」ことが「情けない」ことだと真に思っていたようである。

父の程度にしてこうだから、身体が不自由になつて意識がしつかりしている人なら、なおさら辛い思いで過ごしていることだろう。

かつては、一線を退くと「ご隠居さま」と呼ばれ、人生の先輩として尊敬された。余生を優雅に生きることが当然である時代もあった。

だが、今は「余生をおだやかに過ごす」なんて許されず、「そんな暇があったら働け」と言わんばかりである。それでも動けるうちはまだよいが、動けなくなり「介護される」身になると、たちまち存在そのものが疎んじられる。

本人は、好きでこうなったわけでないと言いたくても肩身が狭くて言えない。ただ、じつと耐えるしかないのだ。

医療の進歩で人は長生きするようになり、介護を必要とする人口も増えてきた。

『介護は個人から社会へ』が目的だった介護保険制度（2000年4月スタート）は、同居家族がいれば、炊事・掃除・洗濯・買い物などの生活支援サービスは原則受けられない。法改正のたびにサービスを受ける条件が厳しくなつ

て、家族の負担がますます増えている。5年も10年も、ほとんどのエネルギーを介護に費やし、疲れ果てている人もいる。介護施設は常に人手不足で働く者の待遇も決して恵まれているとはいえない。

経済優先の社会は、しだいに人が生きることさえ「社会の役に立っているか否か」で計るようになる。すると、時間とお金がかかるだけなんの役にもたない老人や障害者は抹殺すべきで、それが「正義」だと考える人間が出てくる。そして、「相模原障害施設殺人事件」のような大量殺人がおこる。世の中に役立っていないと思つてしまふ人間が、役に立つのはこれしかないと思つてしまふのだろうか。

「死」は想像でしかないから考えなくてもすむ。だが、「老い」は現実である。

老いて生きる過酷な現実をいやというほど見せつけられると、そうなることが誰でも怖くなる。だから、寝たきりにはなりたくない。痴呆にはなりたくない。他人に迷惑をかけたくない。そう思つて身体を鍛え、脳トレに励み、終活に

取り組む。

その気持ちはよく分る。それを否定するつもりもない。でも、それがほんの少し先に延び、程度も少し軽くなるだけかもしれない。誰もが最後までピンピンしているはずもなく、必ずいつかは「生きてしまう」ときがくる。

老いはしごく自然なことである。

多少他人の世話になるとしても、長生きは「米寿」だ「卒寿」だと言つてめでたいことだった。それがいつから「怖い」ものになつてしまったのか。長生きが許容されない社会が、はたして健全な社会と言えるだろうか。

のなか・やすゆき 1943年、岩手県生ま

れ。大手損保会社を定年退職後、会社経営。現在、会社顧問・団体役員。岩手芸術祭実行委員（兼随筆部門選者）・花巻市民芸術祭随筆部門選者・NPO法人「野村胡堂・あらえびす記念館協力会」理事・文芸誌「天気図」同人。著書・随筆集に『記憶の引きだし』『リッチモンドの風』『記憶の片すみ』『深層の記憶』など。

私のルーツ探し

吉原 賢二

私は新潟市に生まれ、東北大学理学部を出て科学者として働いた。父よりも母に似ていると言われたが、時として大胆な思い付きを実行するのは父方の影響かもしれない。二男充の予防接種事故を契機として全国の被害者に呼びかけたり、国の法律を二度にわたって変えさせたりした。大学は仙台だが、国家公務員上級職（6

級職）試験を受けて全国1500人中3本の指に数えられる成績でパス、後に東大理学部木村健二郎先生の弟子となってビキニの死の灰の分析に従事した。

ピュリッツァー賞を受賞したアメリカの黒人作家アレックス・ヘイリーは先祖が18世紀にアフリカで奴隷狩りに遭い、アメリカに連れてこられて以来の歴史を綴った『ルーツ』はその本の題名である。ルーツ探しは人類に普遍的な本能と言ってもよいものであろう。

吉原家は藤原氏の一族斎藤氏の分家である。

斎藤氏は伊勢神宮の祭祀に関係した名門でいろいろな人物を輩出した。平家物語の斎藤実盛もその一人。源平合戦のとき平氏に味方して敗れ没落した。吉原家も同じ運命をたどったらしい。しかしその一族で生き残り、長野県飯山地方の真言宗の修行地に逃れたものがおり、後に武士となって真田家に仕えたものがあつた。真田氏は生き残りをかけて石田三成についた真田昌幸・幸村父子と徳川家康についた真田信之とに別れた。石田三成は敗れたので父子側の家臣はちりぢりになり、ほとんど農民になった。江戸

時代に新開拓地の新潟県西蒲原に移った吉原家の先祖は御蔵番として庄屋並みの暮らしをしていた。

○祖父吉原市太郎

慶応2年（1866）生まれの祖父は若いころに自由民権運動の影響を強く受けたらしい。西蒲原郡道上村にもその波動は押し寄せてきた。福沢諭吉や渋沢栄一など日本人に資本主義を広めた人物の影響のもとに、彼が始めたのは資本主義を象徴する株式の株を売買する会社の設立だった。丁度道上村の自宅が焼けてしまったおり、彼は新潟市に進出して有限会社吉原商會を開いた。県知事をはじめ、県の大地主や有力者に株式の所有を勧めた。彼は大胆な人で少しばかりの会社の変動に動揺しなかった。株の価格の上下に恐れることはなかった。一時は大きな所得があつた。抵当にとつた新潟県西部の土地は強大なもので、それは5万分の1の日本地図に載るほどで私はそれを見ても驚いたことがある。

しかし何時もよいとは限らないのが株の世界である。大正期の第一次世界大戦後に危険な状

態があつたが、持ちこたえた。さらにひどかつたのは1929年の世界恐慌であつた。これは株式の世界にひどいダメージを与えた。どうして吉原商会对応したか不明の部分が多いが、市太郎は食道がんを患つて死亡した。昭和8年(1938)のことであつた。68歳だつた。清算したところ土ゼロと分かつた。郷里道上村三ツ門の財産もまた息子の正治の財産もまったく影響がなかつた。市太郎の生涯そのものがレガシー(遺産)と言える。

○父吉原正治

私の父吉原正治も大胆で夢見る人であつた。若い時は文学青年でアメリカの自由に憧れた。一年先輩の文学青年長沼重隆と親しく、お互いに刺激し合つて東京に出、力行会という移民奨励団体に入つたりした。明治の後期のことだつた。長沼はカリフォルニアに一足早く渡りサンフランシスコを拠点に活動した。邦字新聞に投稿したり文学青年らしいところを存分に発揮し、ついには新聞記者となつて仲間と詩人の気分を楽しんだ。吉原正治は新潟中学から商船学校に移り最終学年の遠洋航海のときにアメリカ

に渡る計画であつた。明治42年(1909)それを実行に移した。驚いた無茶ぶりである。船では大騒ぎになつたが本人は覚悟のことであつた。私にはその真似は到底できない。しかし、青春とはシユトルム・ウント・ドラंकだからそれをあえて実行した父の心境は推察できる。長沼に生活費稼ぎのアルバイト先を教えてもらひ、一日2ドル稼ぎ、そのうちにフロリダの大和コロニーで開拓者を募集していることを知り、そちらへ移つた。ここは酒井釀が主宰する新開拓地で、酒井はもと宮津藩士、同志社出身のキリスト者、アメリカに来てさらにニューヨーク大学も出たインテリだつたからアメリカ人の上層部の信頼も厚かつた。大和コロニーは栄えたようだ。ちなみにここには日本庭園もあつて現在も残つて記念館もおいである。

吉原正治は働いてトラクターや自家用車まで持つに至つた。大正時代の集合写真が残つていて現在我が家にある。正治はもはや無茶な若者ではなかつた。酒井や弟の神谷に感化されたものだろう。長沼重隆がニューヨークの日本郵船支店に移つたのでアメリカ入国の時世話になつ

たお札にと吉原正治が3000ページもあるウェブスターの辞書を贈った。(のちに長沼はホイットマン研究・翻訳で有名になり新潟大学講師や新潟女子短期大学教授を勤める)それは酒井流の義理堅い武士道的精神の現れである。その辞書は長沼が老齢になって施設に入るとき正治の息子の私に送ってきて現在我が家の家宝となっている。

大正13年(1924)兄の吉原静諭が亡くなった。この兄は弟思いの優しい性格の人であった。正治に東京滞在の小遣いをくれたりしていたことがある。正治は兄の死を悼み、アメリカの独身生活を整理し、帰国することに決めた。母タイが熱心に勧めたからでもあった。帰国すると母からは兄嫁で二人の子持ちのハナと結婚するよう勧められた。さすがに最初は断ったが母はしつこく迫った。ハナはまだ正治より9歳若く頼りなげだった。正治は結婚を承諾した。その頃親戚の医者吉原幸太郎の遺産相続問題が起っていた。茨城県の大庄屋に貸したお金が戻らず、抵当にとった財産だったが、幸太郎は子どもがいなかったので本家の次男の正治に譲

ることになったのである。それは広大なもので田畑・森林17町歩などと聞いている。正治はここでアメリカ式の農場を作り東京の市場と直接取引をすることにした。ご褒美のような話だった。正治はアスパラガス・トマト・ブドウなど当時庶民にも流行し始めた野菜・果物を人を雇って栽培したのであった。しかし天は彼の長命を許さなかった。昭和9年(1934)10月2日に頑健だと思った彼は世を去った。

○吉原七治

吉原七治は市太郎の従弟に当たるが正治のほぼ同時代人だった。北海道帝国大学専科(専門学校に当たる)を出て北洋漁業に活躍したが、太平洋戦争の最中は軍に船は徴用されて生活は一変した。一時は船主として南方に招待されマングローをお土産に我が家にもってきてくれたことがある。なんて美味しいものを南の人たちは食べているのだろうと感心したものだ。しかし戦争で大方の船は撃沈され、戦後は食べることをさえてきなくなった。七治夫婦は首吊り自殺した。地元の新聞にも報道されてびっくりした。戦争の犠牲者はこんなところにもいたのだった。

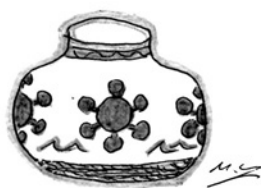
○小林幸子

分家の縁者に小林幸子がいる。NHK紅白歌合戦で人を驚かす派手な演出をおこなったことで有名になった。彼女は不遇の時もあったそうで、気さくで飾らない人柄だった。白根市（現在新潟市に吸収合併）の市会議長の野崎平松氏の奥さんの縁者で、同氏の米寿祝の席で美声を披露したと同席した泰藏（私の兄信一の長男）が語っていた。

以上、我が吉原家のルーツは初めは立派で、あとは尻つぼみの傾向だが、普通の家はこのようなものであろう。

よしはら・けんじ 1929年、新潟市生まれ。53年、東北大学理学部化学教室卒。61年、東北大学から理学博士号を取得、放射化学の分野でもホットアトム化学と呼ばれる領域で国際的評価を得て82年、東北大学理学部化学科教授。96年、「いのちの尊厳を考える会」を設立、二男のインフルエンザ予防接種禍を機に予防接種の安全および被害者救済の運動を起し、20年に及ぶ国家賠償訴訟に勝訴。2008年、新元素

ニッポニウムの実在を突き止め、化学史学会学術賞を受賞。現・東北大学名誉教授。



候補作品ご推薦のお願い

来年2月に依頼状を発送

来年度の第69回日本エッセイスト・クラブ賞の審査基準は下記のとおりです。本年4月1日から来年3月末日までに、初版として発行された単行本が対象です。来年2月に、会員および出版社に推薦願いをお送りしますので、候補作のご推薦をお願いします。

審査委員長は松本仁一氏です。

今年度の日本エッセイスト・クラブ賞のご推薦は会員による推薦作品23点、出版社の推薦作品73点、自費出版17点、合計113点でした。

審査基準

- 一、2020年4月1日より、2021年3月31日までの間に、初版として刊行された書籍とする。
- 二、クラブの正会員（個人会員）の作品、および共同著作は原則として審査の対象としない。ただし、入会の翌年度から五年以内に発表した作品は審査の対象とする。
- 三、著者の国籍は問わないが、日本語で書かれたもの。（翻訳は不可）
- 四、新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。
- 五、他の類似の賞を最近受賞されている方、およびすでに文名を広く知られている方の作品は除く。
- 六、随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など、エッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

第69回日本エッセイスト・クラブ賞
審査委員長 松本 仁一

会員 近況

(順不同)



七月二日、自転車で転んで左肩の鎖骨にひび、腕に深い切り傷とバカなケガをしました。友人から「人間二本足を持っているんです。自転車捨てなさい」とキツイお叱り。もう一人は「しばらく自転車やめなさい」整形外科の看護婦さん「この暑いのに自転車とは」とあきれていました。金曜日の陶芸教室も六月の末以来四ヶ月休んで十月末復活、久しぶりにロクロ。歯医者さんに「親父に」と頼まれたピアマグを造りましたが、幸い、先生に「よく轢けてます」と言われホッ。五時に教室を出る。もう暗く寒い、六月は明るく暖かかった、随分長く休んだなあと実感しました。昔風なら卒寿、自転車も卒業かと迷っています。(中村登紀夫)

自著紹介

『世界観光事情 まち歩きを楽しむ』

秋山秀一著

ヒヴア、プロヴデイフ、トランスバニア地方、ヴァレットタ、オンフルル、福建土楼、サンクトペテルブルク、ポルト……。これら魅力ある世界35カ所のまちの姿と観光事情について、著者が撮影した豊富な写真と共に、臨場感をもって記されている。著者はまち歩きを楽しみながら旅を続けること45年、今年の2月までの海外渡航歴は213回、訪れた国と地域は90カ所にのぼる。

月刊『マネジメントスクエア』誌に掲載した「旅の達人が見た世界観光事情」から、この本が3冊目の書籍化。あたかも自分がその場所を実

際に歩いている、そんな気分になっていただければ……。

(新典社 1950円＋税)



ご寄贈と自著紹介のお願い
刊行から概ね一年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。
会員近況(80字ほど)も合わせてお寄せ下さい。

事務局から

特別維持会費ご寄付のお礼

11月20日までに次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

田中 伸尚	野見山 曉治
田和 潤子	深尾 凱子
大槻 茂	蛭川 真夫
船木 拓生	穂苅 正臣
足立 則夫	和田 亮介
遠藤 利男	坂口 和子
富永 孝子	又吉 國雄
中山 士朗	

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知らせなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど

幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

11月現在の正会員は219名です。従来通り年会費1万5千円で、入会金などは不要です。クラブの運営にとって、会費収入が大きな頼りであることは言うまでもありません。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、現在、新型コロナウイルスの影響で受付事務などを縮小していますので、郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。

ホームページを更新します

スマホにも対応

<http://essayistclub.jp/>

クラブのホームページの更新作業を進めています。

トップページを大幅に改編して印象深いものにする、クラブ賞のページを充実させる一方、会員のエッセーをさらに掲載しやすくすることを目標にしています。

当クラブのホームページは、2008年に「毎年のエッセイスト・クラブ賞の受賞作の情報を伝える」ことを目的に作成されました。

当初は通信速度の制約から大きな写真に掲載することも、スマホに対応することも出来ませんでした。改良を重ね、今回、パソコン画面だけでなくスマホでも、ホームページを読むことができるようになります。

なお今回の更新作業は11月中に完了。年内にはこれまでと同じサイト(<http://essayistclub.jp/>)で公開する予定です。

(理事会)

会員からの寄贈著書

佐藤幸子氏著『ありのまゝの記』

同 氏著『かみのやま温泉 全国

かかし祭り50年誕生秘

話』

秋山秀一氏著『世界観光事情 まち歩

きの楽しみ』

みやざきエッセイスト・クラブより

『上を向いて歩こう 作品集25』の寄贈がありました。

(9月中旬から11月上旬まで)

2020年度理事会報告

第2回常務理事会(20年10月26日)

・ 上半期の収支報告

・ クラブ・ホームページの改革について

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指すとし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男				
理事長	(空席)				
専務理事	秋岡伸彦				
常務理事	栗田 亘	原田 國男			よしだみどり
理事	秋山 秀一	梅津時比古	高村 壽一		
	中丸 美繪	深尾 凱子	藤原 作弥		
	藤原 房子	降幡 賢一	堀尾眞紀子		
	松田 宣子	森永 公紀	森脇 逸男		
監事	大高 英昭	今野 耕作			
事務局長(兼)	降幡 賢一				
名誉会長	村尾 清一				

会 員 名

(2020年11月5日現在 287名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	井上 卓衛
池内 紀昭	池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦
石原 美光	市川 桃子	市田 隆文	稲畑 汀子	猪熊 建夫
岩瀬 達哉	上田 篤	上野 創	上野 誠	臼井 和恵
鵜飼 哲夫	内池 正名	内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治
海老沢 小百合	榎本 好宏	遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子
小澤 秀雄	小塩 節	小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介
及川 直志	大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩
大空 博	大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大槻 茂
大場 司	大村 智	大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子
岡島 成行	岡田 直敏	岡本 厚	奥山 俊宏	

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	河合 弘之	川田 志明
川良 浩和	菅野 光公	北原 歌子	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三	久我 なつみ
久谷 與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄	倉本 宗剛	栗生 将信
栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信	古庄 ゆき子	小池 光
小池 英夫	小谷 瑞穂子	小林 和男	小松 浩	児島 宏子
後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦		

さ行

佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子	佐藤 きむ
佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇	齋藤 健
齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子	坂本 弘道
澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎	三宮 麻由子	志村 ふくみ
塩谷 靖子	篠田 桃紅	下重 暁子	下村 満子	杉江 弘
杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 博	砂原 和雄
関 千枝子				

た行

田中 充子	田中トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實
田沼 敦子	田村 秀敏	田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司
高木 徹	高榎 堯	高階 經和	高島 肇久	高橋 祥友
高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	武本 宏一	谷地 快一
谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次	辻 由美	堤 未果
鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎	ドリアン助川	戸田 桂太
戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸
富永 孝子	富山 和子	鳥海 修		

な行

内藤 啓子	内藤 洋子	中井 幸一	中島さおり	中島誠之助
中野 利子	中名生正昭	中丸 美繪	中村登紀夫	中村 政雄
中村 龍介	中山 士朗	永井 梓	長井 好弘	長田 亮一
長友佐波子	長野 安恒	長屋 龍人	鍋島 高明	並木きょう子
新妻 義輔	二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子	野中 康行
野見山曉治				

は行

葉山美知子	羽中田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	春原 昭彦	樋口 恵子
深尾 凱子	福田 章	福田はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀内 丸恵
堀尾眞紀子				

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村健一郎	正籬 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松原 眞樹	松本 仁一	萬年 浩雄
三島 利徳	水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂
宮本 倫好	宮崎佳代子	村尾 清一	村松 賢一	望月 照彦
桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志
森 美可	森永 公紀	森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男

や行

八百板洋子	八木 恭平	八木 美雄	矢吹 清人	安嶋 明
柳生 尚志	柳澤嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫	山川 静夫

山形 孝夫	山岸 健	山口 寿一	山口 仲美	山下 健
山藤 章二	山室 寛之	山本 一生	山本思外里	よしだみどり
養老 孟司	横山 昭作	吉野源太郎	吉原 賢二	吉行 和子

わ行

和田 亮介	若林 滋	脇 祐三	渡瀬 昌彦	渡辺 祥子
渡辺 綱纒	渡辺 雅隆	渡辺美佐子	渡邊 満子	

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	KADOKAWA
日本経済新聞社	集英社
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



会報 2020 冬 (No. 72 | II)

2020年11月30日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋 1—18—2

明宏ビル別館6階 T105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

http://essayistclub.jp/

Eメール info@essayistclub.jp印刷所
(株)TBSグロウディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価：本体 各1,000円＋税（★は定価：本体1,300円＋税） *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツァラトゥストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パールバス
ブツダ 真理のことは	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクル 夜と霧	諸富祥彦
サン＝テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎

万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美
紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブツダ 最期のことは	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禅
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂 武
カント 永遠平和のために	萱野稔人
ダーウイン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平

ne
CLUB